

## 書評

『紛争社会と民主主義—  
国際選挙監視の政治学』

依田 博著

Freedom House の発表によれば、世界191ヶ国のうち117ヶ国が民主主義政治の国とされており、現代世界はまさに民主主義の時代である。民主平和論の立場からすれば、これは世界平和を拓げるものとして大いに歓迎されるべきことである。民主政治との関連では、本来、国家主権・内政上の問題とされている国内選挙に第三国・国連などの国際機関・数多くの国際 NGO が公正な選挙の監視・監視のためにかかわっていることが注目されよう。日本もナミビア選挙監視団への参加(1989年)以降、ニカラグア、ハイティ、カンボディア、南アフリカ、モザンビーク、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、インドネシア、東ティモールなど数多くの選挙の監視活動に参加してきた。本書は、これらの選挙のうち、カンボディア(93、98年)、南アフリカ(94年)、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ(96、98年)およびインドネシア(99年)と、自ら多数の選挙に選挙監視団の一員として活躍された「実践的学者」の手になるものである。

本書は先ず、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの選挙監視に携わった際の OSCE 研修体験談から始まっている。著者は本書冒頭で、国際社会は「異文化の交差点」との基本的認識を示しているが、文化背景を異にする人々の相互理解の難しさが浮き彫りとなっている。「法の支配」の講義の背景も、様々な社会からの参加者が参集している点から納得しうるところである。紛争社会、民主主義の原

則が政治文化として根をおろしていない社会での民主的・公正な選挙を実施することの難しさは、現実の選挙をめぐる選挙体制・有権者登録(第3章、第4章)などで手際よく示されている。放置しておけば、人道援助までが自己の政治勢力伸張のために利用されているのが厳しい現実の世界である。「紛争には決して中立的でない」紛争政府が当事者となっている選挙における、中立的第三者の監視・監視の重要性が自から読み取れよう。

選挙監視員の難しさは、「戦闘での完全な勝利を奪われたとの逆恨みもあって・・・勝利を妨害した輩」視されるところにもある。監視団の研修が、包括的内容に加え安全確保面にも及んでいることも、かかる背景に照らしてみると、なるほどと頷けよう。

国際機関で働く人間の必要条件として言語と専門教育を挙げ、「日本の教育制度では送り出すことは無理」とばっさり切り捨てられているが、この厚い壁が破られる日の来ることはあるのだろうか。

本書はその副題「国際選挙監視の政治学」が示すように、紙面の7割が選挙監視にまつわる構成となっている。しかし、最も注目される議論の展開は第7章および第8章であろう。

メガコンペティションのグローバル化時代において、世界経済で一人勝ちをし、民主主義のメッカと目され、選挙監視においても主導的役割を果たしているアメリカの未来を「国家の解体とは無縁であるとは誰も断言できない」と大胆な疑問を投げかける。アメリカ社会を、一人勝ちを誇る栄光とは裏腹に「経済的不平等を縦糸とし、人種間

の不平等を横糸とする社会」であり、「参加の機会  
は平等であるが、その条件は不平等であり、条件  
の不平等は機会の形式的平等を経て結果の不平等  
を拡大する社会」と分析する。そして、米国上下  
両院で導入されている小選挙区制は、勝者独占で  
マイノリティに不利な制度と断じる。民主主義の  
真骨頂と認識されがちな多数決原理は、しょせん  
勝者独占モデルであり、同質性の高い社会のみで  
円滑な機能が期待される。勝者独占のウェストミ  
ンスター・モデルは、他方、多極社会(定義は201  
頁参照)では、勝者と敗者、多数派と少数派の関  
係・対立を固定化する不安定要因として作動する  
傾向を生むこととなる。これに対して、権力共有  
の合意型統治モデルは、少数者の利益をも統治メ  
カニズムに反映させることが可能な、多極社会に  
有効なモデルと指摘、その妥当性は南アフリカの  
統治などにおいて実証されたとし、「紛争後社会  
の再建のみならず、多くの社会の政治モデルとな  
っている」と指摘する。

著者は最終章において、現代政治の不安定要因  
としての「境界問題」に論及する。近代西欧国家体  
系においては主権国家の構成要素としての領域は

不可侵のものとされ、領域内の問題は基本的に国  
家の専管事項・内政問題とされてきた。しかるに、  
いまや国民国家は境界の動揺に直面していると指  
摘する。地球を一つの単位とする経済的境界の誕  
生がその背因であり、そこでは国家主権を超えた  
次元での対応・行動が求められ、ルール作りが進  
行している(環境・人権分野)。にもかかわらず、  
国家は本来脱国家的問題を扱うフォーラムにおい  
ても国益追求のパターンを展開し、国内的には「  
社会的不平等が民主主義の理念である政治的平等  
の維持を困難にしている矛盾」を抱えているとす  
る。まさに、民主主義は普遍的理念であるが、民  
主政治制度はそれと乖離し現実の矛盾を抱えるこ  
ととなる。そして、長期的課題としては、近代国  
家システムにおける主権の相対化に伴う「上位の  
政治単位の編成」が求められるのである。国際新  
秩序の模索の旅である。

紛争社会の選挙の難しさ、民主主義政治制度の  
限界を含め、評者も本書から多くを学んだが、國  
際選挙監視の政治に関心を持たれる方々に必読の  
書としてお勧めしたい。

瀬崎 克己